パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して (XXXI)

竹下春日

(二) 神の隠顕の原因について。——≪世界はあわれみと裁きとを行なうために存続し，人々はそこに神の手から出てきたもののようではなく，いわば神の敵として存在している。彼らに対して神は，彼らが神をたずね神に従うことを望みさえすれば，神のもとに立ち返えるのに十分な光を，恩恵によって与えておられるが，彼らがたずね従うことを拒むならば，彼らを罰するのに十分な光をも与えておられる。≫[11]，≪……神が，神を試みる者にはみずからを隠すということと，神を求める者にはみずからを現わすということとは，どちらも真実である。なぜかといえば，人間は神を知るに値しないものであるとともに，神を知りうるものであり，その堕落によっては値しないが，その最初の本性によっては知りうるからである。≫[12]

以上神の隠顕の理由は，これらの引用によって明らかであるが，なお後者の断章中の≪その最初の本性≫とは，人間（アダム）が神によって創造された時の状態——清純無垢の状態を，指している（XXIX 回のVの(一)参照)。而して神の隠顕の原因なるものは，帰するところ，神が恵みと罰とを，人々の神に対するあり方に相応しく与えるという，この神自身の態度に因るのである。それゆえ，前回において扱われた人間存在の≪悲惨≫と≪偉大≫及び≪不幸≫と≪至福≫という対立ないし矛盾も，結局はこうした神の裁きがもたらした結果に過ぎないのである。

ところで既に前回で述べられた如く，神による刑罰も，それ自身が究極の目的ではなく，人間自身の悲惨の自覚を媒介して，神自身の許へ立ち返えらせよ

うとする，神の≪愛≫ la charité の現われなのである——≪愛は表徴的な戒めではない。イエス・キリストは表徴を取り去り，真理を立てるために来られたのだ……≫ (La. 532-Br.665 (24°章))。

㈢ 聖書と隠れた神。——聖書の語句の表徴性，その意味の二重性も，隠れた神の業によるものであり，≪文字通りの意味≫の下に≪隠れた意味≫が隠されているのも (24°章)，隠れた神の意図に由来するのである。而しては聖書におけるこの例の典型を，われわれは，次の断章において見出すのである——≪神は，メシアを善人に認めさせ，悪人には認めさせまいとして，彼〔イエス〕のことを次のように預言させられたのである。もしメシアの来臨の仕方が明らかに預言されていたら，悪人にとっても漠然としたものが無くなっていたであろう。／もしその来臨の時期が漠然と預言されていたら，善人にとっても漠然としたものがあったであろう。……そこで，時期は明らかに預言され，仕方は表徴によって預言されたのである。……≫[13] (La. 489-Br. 758 (24°章))。

㈣ 自然と隠れた神。——上来述べられたところにより，われわれは，預言者・使徒たちの言行およびこれらを記した聖書の語句が，≪隠れた神≫の隠れた意図を≪表(象)徴≫として表現していること，即ち表徴の背後には神の意図が隠されているのを，知るのであるが，われわれは次に，≪自然≫の背後にも≪隠れた神≫が隠れておるのを，知るのである。パスカルは，ロアンネス嬢宛の書簡中で，次のごとく述べている——≪神様は受肉の時が来るまでは，私どもの眼を蔽っている自然というヴェールのかげに，ずっと匿れておいでになったのです。≫[14]では神は如何なる仕方で，自然の背後に隠れているのであろうか，換言すれば隠れた神は，自然のうちでは，いかに自己を表現しているであろうか。パスカルは，卓抜なる断章 La. 390-Br. 72 (12°章) 中で，≪自然は自然の像と自然を創造した者の像とを，すべての事物の上に刻みつけた……≫と述べ，≪自然は恩寵の写像 (une image de la grâce) である≫[15]と書いている。かくしてわれわれは，≪自然の像≫と≪自然を創造した者の像≫との二重の≪像≫の背後に，神が匿れておることを知るのである。

㈤ 神の超論理性について。——パスカルは，既出の断章(La. 390-Br. 72)

中で，≪虚無≫ le néant と ≪万有≫ un tout とが，≪神において，ただ神においてのみめぐりあう≫旨を述べている。彼によれば，神は有と無との≪真の根源≫ le vrai principe[16]であり，≪はかり知れぬ秘密のうちにどうしようもなく匿されている≫[17]のである。そうしてこの事が，神の隠れの真の意味である。≪根源≫は，存在と無とを超越しており，これら有無の範疇によって把握することは，どうしても出来ない。だから≪神があるということは不可解である，神がないということも不可解である。≫ (La. 325-Br. 230 (18°章))——≪理性においてではなく，心情において感ぜられる神。≫ Dieu sensible au coeur, non à la raison.[18]

以上がじつに，パスカルの神とその隠れとの真意である。

XI　宗教と理性との関係

叙上のごとく≪隠れた神≫の隠れとは，神の超論理性を意味しうる。このことは，≪隠れた神≫を中心とするキリスト教が，理性的次元を超えた超自然的のものであることを，意味している。かかる意味において，この宗教は理性を否定するものであるとは言え，宗教に対する理性の意義を，全く否定するものでは決してない。次の諸断章は，この事柄を明白に物語っている——≪もしすべてを理性に従わせるならば，われわれの宗教は神秘的，超自然的なものが何もなくなるであろう。／もし理性の原理に反するならば，われわれの宗教は不条理で，笑うべきものになろう。≫ (La. 358-Br. 273 (18°章)), ≪理性の最後の歩みは，理性を超えるものが無限にあるということを，認めることにある。それを知るところまで行かなければ，理性は弱いものでしかない。……≫[19], ≪理性の服従と行使，そこに真のキリスト教がある。≫[20] これらの断章によって，われわれは，「神の存在の証明」なるものが，——パスカルのそれでさえもが——一定の効果的役割を果すにせよ，究極的には真の信仰を与えるものではないことを，理解するのである。何故なら，「証明」とは畢竟するところ，理性的次元における事柄に外ならないからである。それゆえパスカルは，次のように説いている——≪信仰は神のたまものである。推理のたまものであると

言っているのだと，諸君はおもってはならない。他のもろもろの宗教は信仰にとどくために推理をしか与えなかった。しかし推理は信仰へみちびきはしないのである。≫[21]，≪信ずるのに三つの方法がある。即ち理性，習慣，霊感がこれである。理性をもつ唯一つの宗教であるキリスト教は，霊感なしに信ずる人々をキリスト教の眞の子としては受け入れない。それは理性と習慣とを排除するというのではない。それどころか却って，心をもろもろの証しに向けるとき，習慣によってみずからを固めることが必要である。がしかしながら，へりくだることによって，真にして有効なる効果を与えうるただ一つのものたる霊感にこそ，みずからを捧げなければならないというのである。≫[22]，≪すべてのことを円滑に処理なさる神の導きは，宗教を，精神のなかへは理性によって，心情のなかには恩恵によってお入れになる。……≫[23]。

XII　結　　び

われわれは，今回および前回すなわち≪アポロジー≫の解説（第2部）を通じて，パスカルの≪アポロジー≫における諸重要問題にかんする解説を試みて来た。かかる重要問題とは，——(1)幸福（至福，最高善）にかんするもの。(2)至福へ到るべき実践的方法にかんするもの。(3)人間本性（悲惨と偉大）の矛盾にかんするもの。(4)聖書の記事内容の史実性の証明。(5)神の存在にかんする証明。(6)≪隠れた神≫の＜隠れ＞に対する疑問にかんするもの。(7)≪隠れた神≫の諸性格にかんするもの。(8)宗教と理性との関係にかんするもの，の8個である。

これら諸問題への回答ないし解決には，恒に≪隠れた神≫の意図および諸性格が厳然と支配しており，パスカル的実存は，ここに≪神の手の重み≫ un appesantissement de la main de Dieu[24]を，胸中に実感するのである。

われわれは，拙論の XXI 回以降二種類の解説（XXI～XXVIII 回が，解説（第1部）である）を行ったが，既述のごとく（XXIX 回参照），両解説はその性格を異にするものでありながら，相補的役割を果すものであって，パスカルの≪アポロジー≫理解のためには，不可欠のものである。ともあれ，≪アポ

ロジー≫の未完は，壮大かつ華麗なる〈未完〉であることを，われわれはわれわれ自身の研究を通じて，実感せざるを得ないのである。　（XXXI回了）

註

1) XXIII回の21°≪永続性≫の章，Ⅲの(一)の(ロ)参照。
2) La. 569—Br. 624 (22°章)。
3) La. 573—Br. 625 (22°章)。
4) La. 510—Br. 691 (24°章)。
5) La. 491—Br. 684 (24°章)。
6) La. 492—Br. 728 (24°章)。
7) La. 652—Br. 715 (27°章)。
8) La. 656—Br. 736 (27°章)。
9) 「イエス・キリストの一生にかんする預言とその成就による証明」以外に，次の多面的なる諸叙述が，神の存在の証明を補強するものとして展開されている——(1)イエス・キリスト自身の言行による証明。(2)メシアの来臨の結果とその徴表としての，聖らかさ。(3)イエス・キリストの弟子たちは，詐欺師ではないこと。(4)神の証人としてのユダヤ人たち。(5)イエス・キリストが，旧約・新約の≪中心≫の位置を占めていること。(6)ヨセフによって象徴されたイエス・キリスト。(7)「カエサルのほか，私たちには王はない。」の言葉による証明。(8)聖書の記述の特性による証明。(9)神の摂理による世界の動向からする証明。(10)イエス・キリストにかんする歴史家たちの無記録は，イエス・キリストの実在に対する反証とはならないということ。(11)≪三つの秩序≫における偉大なるものの光輝についての叙述。(12)マホメットとイエス・キリストとの比較。(13)奇蹟の組み合わせの非偶然性による証明。——以上XXVII回の〔II〕〜〔XIV〕参照のこと。
10) パスカルは，われわれの所謂「統計を利用する数学的手法」の使用について，これを≪アポロジー≫の諸断章中において，明言しているわけではない。われわれも亦かかる直接的な表明が存したと，主張するものではない。われわれは，パスカルの証明方法にかんし，——客観的に見て——叙上の如き名称を以って呼びうる方法が用いられておることを，たんに指示するのみである。

　しかしパスカルが，かかる数学的手法を意図していたことは，推測に難くない。(イ)第一に彼が秀れた物理学者，数学者であったこと，(ロ)第二に有名なる≪賭≫ le Pari の断章（La. 343—Br. 233）において≪確率計算≫の方法を用いていること，(ハ)第三に既出の断章 La. 508—Br. 642 において，パスカルは次の如く述べていた——≪旧約と新約とを一度に証明すること。／これらの二つを一気に証明するには，一方の預言が他方において成就しているかどうかを見さえすればよい。……≫

と。この引用文中の≪預言≫ les prophéties なる語が，複数形であることは，重大なる意味を持つ。なぜなら，預言の数が増大すればするほど，証拠力が≪強固≫ solidesになることは，明らかだからである。しかも多数の相互に異なる預言（具体的には，イエス・キリストの一生の各部分にかんするもの）の組み合わせとしての組織的整合的連関の複雑化（これは，預言の数が増すほどその複雑さも高度化する）と，これら複雑なる預言の組み合わせ的連関の実現成就という巧緻さのもたらす証明の説得力が，神の存在の証拠なるものを，ますます≪強固≫にするということは，見易い道理であると言えよう。そうして秀れた科学者であったパスカルが，この見易い道理なるものを，彼の念頭に置いていたであろうことも，われわれの容易に理解しうるところである。事実パスカルは，≪預言の成就した出来事≫が≪一つの奇蹟≫ un miracle であると述べ (La. 626—Br. 706 (27°章))，かつ≪奇蹟の組み合わせ≫なる語を残している (La. 579—Br. 809(128°章))。而してこの≪奇蹟の組み合わせ≫ les combinaisons des miracles という語こそ，神の存在の証明にかんして，彼パスカルが統計および組み合わせの成果に係わる数学的発想を抱いていたことを，如実に物語るところのものである。

11) La. 734—Br. 584 (29°章)。
12) La. 315—Br. 557 (29°章)。
13) La. 489—Br. 758 (24°章)。
14) Lettre de Pascal à Mlle de Roannez, fin d'octobre 1656.
15) La. 519—Br. 675 (24°章)。
16) La. 334—Br. 236 (11°章)。
17) La. 390—Br. 72 (12°章)。
18) La. 225—Br. 278 (18°章)。
19) La. 373—Br. 267 (18°章)。
20) La. 352—Br. 269 (18°章)。
21) La. 376—Br. 279 (18°章)。
22) La. 396—Br. 245 (18°章)。
23) La. 357—Br. 185 (18°章)。
24) La. 339—Br. 200 (10°章)。

(XXXI 回了)